

「資本論を読む会」便り

2025.4.26 No. 97

3月は次の箇所を読みました。

第Ⅰ部：第1篇 第1章 第3節 Aの二 a 相対的価値形態の内実 (残り)

第Ⅱ部：第3篇 第12章 第4節 マニファクチュアの中での～ (の中ほど)

※ 今回、編集人は欠席したので、レジュメや参考書、レポーターからお聞きしたことなどにより、読んだ箇所の要点をまとめました。

段落は、大月書店の全集版の本文の字下げと傍注の付け方で区切っていますが、原則通りでない場合もあります。段落番号の後の小さい字は、(原著ページ番号)と段落の出だしなどです。

第98回

第Ⅰ部 第1篇 第1章 第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

X量の商品A=Y量の商品B または X量の商品AはY量の商品Bに値する。
(20エレのリンネル=1着の上着 または 20エレのリンネルは1着の上着に値する。)

二 相対的価値形態 a 相対的価値形態の内実

第7段落 (66)「リンネルの価値関係の中で上着がリンネルと質的に…」 ～

リンネルの価値関係の中で、上着はその現物形態で価値を表している。

- リンネル=上着 という価値関係の中で、上着は、リンネルに質的に等しいもの・同じ性質のもの、つまり価値として認められている。
- この関係の中では、上着は価値を現物形態で表すものとして認められているが、上着自体(現物形態)は単なる使用価値でしかなく、価値を表していない。つまり、上着は、リンネルとの価値関係の中では、単独で見ると多くの意味を持っている。

金モールのついた上着の中の人間の例は、葵の紋所の入った印籠をもった爺さんはただの隠居爺さんではないという話に似ていると思います。

第8段落 (66)「上着の生産では、実際に、裁縫という形態で、…」 ～

リンネル=上着 の関係では上着は価値体としてのみ認められている。

- リンネルとの価値関係におかれた上着は、人間労働力一般だけが支出されたものとして通用している。
したがって、具体的有用労働である裁縫労働によって形作られた上着の具体的な姿態そのものが、価値そのものとして通用している。
- つまり上着は、その身体で価値を表すもの、「価値体」として通用している。

リンネルとの価値関係の下では、価値が上着の姿をとって現われている、ということです。

第9段落 (66)「こうして、上着がリンネルの等価物となっている…」 ～

一商品の価値が、他の商品の使用価値で表される。

- リンネル=上着 という関係の中では、上着は等価物であり、上着形態は価値形態である。
つまり、一つの商品の価値は他の商品の使用価値で表される。
- リンネルは、価値が実際に見える物的な姿(上着)をとって現れる価値形態を受け取った。

等価におかれる上着が新たな形態規定(その自然形態が価値を表す)を受けとったというわけです。

第10段落 (66)「要するに、さきに商品価値の分析がわれわれに語った…」 ～

商品価値の分析で分かったことを、リンネルは商品語で語っている。

- リンネルが上着を等置関係(価値関係)に置くとことで、
 - 1) 抽象的人間労働という「価値を形成する労働の独自の性格」
 - 2) 「人間労働の凝固体」としての価値の「対象的性格」という「商品の価値性格」の二つの内容を語っている。

商品と商品の関係が、ある内容を表していることを、「商品語」で語る、と比喩的に表現しているようです。これに対して、価値の分析から分かったことを、価値の分析がわれわれに「語ったこと」と表現しています。レジュメではこの対比を表にしてみましたので、少し簡略化して、ここに載せておきます。

価値の分析が語ったこと		リンネルが「商品語」で語っていること
労働は人間労働という抽象的属性においてリンネル自身の価値を形成する。	⇒	上着はリンネルと同じ人間労働から成りたっている。
リンネルの価値対象性はリンネルの現物形態とは異なっている。		価値が上着に見え、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つである。

第11段落 (67)「こうして、価値関係の媒介によって、商品Bの…」 ～ (注18まで)

まとめ：価値関係の媒介によって、商品Bの現物形態は商品Aの価値形態になる。

- 価値関係の媒介によって、商品Bの現物形態は商品Aの価値形態になる。
言いかえると、商品Bの身体(現物形態)は商品Aの価値鏡になる。
商品Aの価値は、商品Bの使用価値で表され、相対的価値の形態をもつ。

「価値鏡」の鏡とは、 $A=B$ のBが鏡で、AがBを見るとそこにはAの価値が写っている、というわけです。商品Bは価値表現の材料になっています。

第Ⅱ部 第3篇 第12章 分業とマニファクチュア

第4節 マニファクチュアのなかでの分業と社会の中での分業

今回は第7段落まで進みましたが、今回は、この段落の検討に終始しました。申し訳ないのですが、編集人は今回欠席したので検討内容を紹介することができません。そこで、前号の「便り」に掲載した第7段落の要点をさらに整理したら皆様の参考になるのではないかと考えました。

第7段落 (371)「われわれはまず第一にマニファクチュアの起源を、次に…」 ～

社会的分業と作業場内での分業は本質的に異なる。

この段落を1行にまとめるとこうなりますが、最初に類似点が指摘されています。表にすると、次のようになります。

	社会的分業	マニファクチュア的分業
類似点	社会的分業が一つの内的な紐帯によっていろいろな業種がつなぎ合わされている場合、部門間の関係が分かる。 例: 飼畜業者が皮を生産し、製革業者は皮を革に変え、製靴業者は革を長靴に変える場合、各業者は段階生産物を生産し、最後の出来上がった長靴は、彼らの特殊労働の結合生産物である。	一つの作業場で労働のつながりが見え、分業の関係を理解できる。

この類似点から、スミスは、社会的分業とマニファクチュア的分業との相違は、ただ観察者の主観から来るものだと考えた、と指摘されています。

次に相違点です。この段落に出てくるもの全てを表にまとめてみました。

	社会的分業	マニファクチュア的分業
本質的相違点	飼畜業者や製革業者や製靴業者のそれぞれ独立した労働のあいだに関連を形成するのは、彼らのそれぞれの生産物の商品としての定在である。	部分労働者は商品を生産せず、何人もの部分労働者の共同の生産物が商品になる。
相違点① 独立した労働を 結合させるもの	いろいろな労働部門の生産物の売買によって媒介される。	いろいろな労働力が同じ資本家に売られて結合労働力として使用されるということによって媒介されている。
相違点② 分業を成立させる 生産手段の役割	互いに独立した多数の商品生産者のあいだへの生産手段の分散を前提する。	一人の資本家の手中での生産手段の集積を前提する。

相違点③ 生産者と生産手段の関係	いろいろな社会的労働部門のあいだへの商品生産者と彼らの生産手段との配分では偶然と恣意とが複雑に作用する。	比例数または比例関係の鉄則が一定の労働者群を一定の機能のもとに包摂する。
相違点④ 生産者を規制する規則	あとから、内的な、無言の、市場価格の晴雨計の変動によって知覚される。生産者たちの無規律な恣意を圧倒する自然必然性として作用する。	資本家の計画により、初めから計画的に守られる。
相違点⑤ 生産者に対する権威	社会的分業は独立の商品生産者たちを互いに対立させる。彼らは、競争という権威のほかには、どんな権威も認めない。 (「万人に対する万人の戦い」)	資本家のものである全体機構のただの手足でしかない人々に対して資本家の持つ無条件的な権威を前提する。

相違点③の所で「社会的分業では、いろいろな社会的労働部門のあいだへの商品生産者と彼らの生産手段との配分では偶然と恣意とが複雑に作用する」とあります。この「複雑な作用」について、本文は「いろいろな生産部門は絶えず互いに均衡を保とうとしている。というのは、…」と続けて説明しています。要約すると、

●社会の様々な生産部門は、バラバラに生産しているように見えながら、一定の均衡を保つ傾向がある。

- ①商品生産者は一定の使用価値を生産するが、社会が必要とする量との差異が生じる。社会的分業の内的な紐帯がいろいろな欲望量を結び合わせて均衡を保とうとする。
- ②社会が処分できる総労働時間のうちのどれだけを、個々の商品種類の生産に支出することかできるのかは、それぞれの生産物が商品として売買されときの価値法則が決定する。
この価値法則の貫徹の仕方は、社会的生産が絶えず均衡を崩し攪乱するのを元に戻そうとする作用として現われる。

となるでしょうか。①は、例えば電気自動車の需要が大きになると、各社こぞって開発・増産へと進むということでしょう。これに対して、②の価値法則というのが分かりにくく、議論になっています。

最後に、相違点⑤の後に、本文は、

●資本家たちは、

- ①マニファクチュア的分業、つまり労働者の細分作業への拘束と資本のもとへの無条件的服従を、労働の生産力を高めるものとして賛美する。
- ②社会的生産においては如何なる統制や規制をも、個別資本家の不可侵な所有権や自由な自律的な独創性への侵害として非難する。

といった内容が続きます。自由な競争によるビジネス・チャンスを妨げられたくない、ということでしょうか。